

# 合同出版記念会の記

於 アルカディアア市ヶ谷（令和7年12月7日）

穏やかにもの言ふすべを自らに課すとき不意に寂しと思ふ

\*

新屋希子歌集『やさしい球体』

松村千津子歌集『縮緬光』  
教員を定年退職後の二十一年間に詠まれた歌の中から、高野公彦氏の選で五百三十五首が収められた第一歌集。日常生活や旅行詠、生徒を詠んだ歌、母への思いなど、誠実で端正な歌の姿は、真つすぐに心に響く。社会詠には揺るがぬ正義感が表われている。

また、作者は短歌と同時期に弓道を始め鍛錬を続けている。関連する歌は五十首を数え、歌集を特徴づけている。弓道に励み到達した境地は、短歌の道にも相通じるものがあると感じた。

歌集名は「鴉の海を創りし神を感じつつ縮緬光の湖心を渡る」に依り、高野氏が付けた。あとがきに「丹後縮緬は母が格別に好んだ絹織物……」とあり、亡き御母堂を偲ぶ歌集名となった。薄紫のグラデーションの表紙が美しい。

（荒川ゆみ子）

大宇宙の塵にすぎないこの私弓引けば

的が響みてくれる

\*

中田英子歌集『なつかしいうた』

一九八五年（五十五歳）から二〇二五年（九十五歳）までの作品から四五一首を収めた第一歌集。歌集名は「食べながら隣れる人がうたひ出すさうそれはきつとなつかしいうた」から名付けられた。

作者の、周囲を見つめる優しい眼差しが歌を通して伝わり読んでいて心暖まる作品が多い中、本音を吐露した歌や時事詠には説得力があり、作者の理性を感じず。姑を、また夫を見送った後、二十余年

を雪深い山形の地でひとり自立して来られ、現在は施設に暮らす作者だが、入居を前に「人になごみしづかに生きむと心決め施設入居のその日を待てり」と詠っている。このような作者を過去、現在、そして将来に渡って精神的に支えるものの一つが「歌」であると読み取れる作品も散見され励まされた。（浅田みどり）

柔らかで鮮やかな表紙にまず目を奪われる。約七年間四三八首を収めた第一歌集は、情と知の不思議なバランスを保ちながら読後すっきりとしたやさしさを残す。日々の出来事は生活に埋もれる現実としてだけ詠われるのではなく、一方で沸き起こった感情はブレパレートにのって子細に観察され、新屋氏独特の観点から詠まれる。

獣医学生から医薬品開発の仕事に就いたという作者。リケジョ（理系女子）の先陣にして家庭、子育てとの両立は多くの苦労や様々な戦いがあったはずだ。そこで培われた仰視と俯瞰の切り替え、発想の転換、能動と受動の匙加減など、百戦錬磨の生き方を映すように独自の観点をもった短歌が生まれ、それがこの歌集の魅力となっている。（磯川 朋美）  
かすかなる温さの翅を触れあひて鳥居に群れる越冬の蝶

\*

## 米田靖子評論集『吉野の風』

前登志夫の歌の世界を、I村をめぐる歌、II前登志夫と古事記、III山中の風の三章をもって論ずる。殊にI章は、著者の「同じ大和びととして」という情と志が感じられ、印象深い。第一歌集『子午線の繭』から第十一歌集『野生の聲』まで、歌のきめ細やかな鑑賞によって「村とは何か」「帰る村はあるのか」と問い続け、歌い続けた作者と、さまざまな表情を持つ村をくつきりと描く。そして「自然への畏怖や憧憬」、「存在するものの始源の姿」を求める心が、歌や村への思いの深まりを見せるのだと認識する。

今、前登志夫の歌を読む意義を、考えさせられる。  
(奈良橋幸子)

この最晩年（平成二十年四月死去）の歌々は、死者の心を問近にすることによって、現代人の魂の戻る場所を描こうとするところから生まれてきているように思われる。

### \*

## 鮎川清歌集『命なりけり』

作者の鮎川清さんは現在九十五歳。それでも、詠まれた歌から、通常思い浮かべる〈古い〉の感じはありません。それ

は、作者の気持ちがいだけでなく、意識して自分と距離を置き、過度な思い入りを制し、歌を詠もうとする姿勢からきています。これは、天性のもので、上質なユーモアもそこから生まれます。

歌集は、作者のものの見方や、生き方と、向き合う要素の強い文芸です。作者に、どれだけ共感できるかが、作品の受けとめ方にも、大きく影響します。

鮎川さんの歌は、多岐にわたりますが、内容に沿って、さまざまに工夫され、しかもそれを感じさせません。

『命なりけり』が、この歌集を手にした方に、楽しんで読んでいただけますことを、願う次第です。（福島健太郎）

妻居らば見ることのなき納戸より前世  
紀なる力二缶の出づ

### \*

## 島本敏子歌集『面上げて行く』

島本さんはコスモスに入会して今年の一月で二十一年になる。この歌集に収められた歌は五一二首。それは自分の分身であるかとがきに記している。この歌は、歌集名になった歌であり、歌集全体の主題となっていて、力強さを感じさせ

作者の人生は覚悟がないと生きていけないものだった。今までの人生は、北風の中をまっすぐ前を向いて歩いてきた人生だった。そのイメージは、歌集の初めから終わりまで続く。その一貫した生き方が作者の魅力であり、持ち味になっている。夫の死、息子さんの死を経験してこれからも作者は生きていく。揺るぎ無い愛情を家族に注ぎながら歌を詠む姿に圧倒される。

(石山 朱音)

我が生に確かな覚悟あるごとく面上げて行く北風の中

### \*

## 四野宮和之歌集『丙夜の音』

東京都多摩市にお住まいの四野宮和之さんの第二歌集。定年退職後の平成二十年から昨年（令和六年）まで、十七年間に詠まれた四七二首を収める。

再就職後の職場での光景やご家族を詠まれた歌のほか、様々な日常の場面を丁寧に掬い取った歌が、歌集のあちこちに散りばめられていて、どれもがほんのりとユーモアを湛えている。私としては、もっと仕事を詠んだ歌を読みたかったところだが、定年退職後とあつては無理な注文というもの。仕事といえば、電鉄会

社に長く勤めていた作者らしく、電車を詠んだ歌がいくつか収められていて、どの歌にも電車への愛情が感じられる。その中で私が一番好きなのがこの歌。電車を見る視線がとても優しい。

(小倉 敬)

急行が陽のさす多摩を走りをり都心の雷雨にぐつしより濡れて

\*

荒巻陸代歌集『幸せのマル』

六十歳から七十六歳までの十七年間の作品四六一首を収めた第二歌集。その間姑、故郷の母上、夫君の三人を見送られている。夫君は『癌人のうた』を上梓された荒巻和雄氏である。

ご家族三人を介護された日々。とくに五つの癌に罹患した夫の闘病生活を長い間支えられたお歌が核をなす。

日々、夫の命と向き合うことを覚悟され、夫との残された時間を大切にいとおしむお歌の数々は胸を打つ。

しかし、作者の歌は大らかで明るい。リズムが良く韻律性の高いオノマトペが多うされ介護の大変さを吹きとばしてしまいうるさを持つ。また忙しい中でも、幸せを見つけるのがうまい作者。それら

の歌に、読者も強く励まされるのである。

(内藤 丈子)

二歳児が今夢中なるアンパンマンその顔かたち幸せのマル

\*

橘 芳園歌集『僧侶日日』

『僧侶日日』には、二六歳から五五歳までの、ほぼ三〇年にわたる五一〇首が収められている。二五年前までの作品である。冒頭歌に「おほかたは食器工場の徒弟なる子ら油手に期末試験受く」、末尾から二首目に「祖父から子教師四代とりわけて難しき世に子は教へゐる」とあるように、作者も高等学校教諭と僧侶の仕事が続けてきた。しかし、作者には、

「釈迦の経みな正しきか一生とふ黄金時間経誦みてゐる」「弔ひに経など誦まずおはしけむ愚禿親鸞大愚良寛」などのように、寺や宗教の在り方に自問自答する作品が七割を超えており、そこには優れた歌も多く、本歌集の大きな特徴となっている。ただ、次に示す末尾歌のように、叙景歌や心象詠へと進もうとしているようにも思われる。

(豊島 秀範)

舞ひ上がる一つ蛩は谷の空ひしめく星のなかに消えたり(末尾歌)

\*

木畑紀子歌集『女郎花月』

二〇一八年後半から二〇二四年前半までの四二七首による第七歌集。後半に、十代から三十代までの初期作品一五三首が収められているのが特徴である。

コロナ禍という未曾有のできごとをはさんで、家族や友人はもちろんのこと、身近な動植物たちも含めた生命への慈しみと平和への祈りが詠われている。「さみしさも歌に実れよくりの木にあをいが太る女郎花月」文語定型の韻律は、作者の深い思いと響きあつてうつくしい。

十五歳で詠んだ歌「うれひなき子等たはむる公園を行き過ぎがたくしはし佇ちをり」が、朝日歌壇宮柊二選に入ったことでコスモス短歌会と出会った作者。宮柊二への感謝と敬愛がちりばめられているのも、本歌集のもう一つの特徴といえるだろう。

(坪井 真里)

宮柊二選に入りたる遠き日に短歌といふ明り窓を知りにき

\*

辻恵泉歌集『ドイツ・レクイエム』

二〇二五年までの二十五年間の作品五二七首を、八十五歳を目前に纏められた

## 第一歌集。

夫婦揃って、国内のみならず海外も世界各国を旅し、大好きな音楽鑑賞を通して五感で感じるままに作歌してきたと言っただけあり、旅先での独自の視点が効いている。また作者は、香道をたしなみ、聞香、組香を通して禅宗の精神、礼儀作法、古典文学や書道の素養なども身につけ、そこで培われた感性の鋭さも感じられる。五十年以上仲睦まじく過ごされて来たご主人との別れが歌集後半にあり胸を打つ。〈ブラームスの「ドイツ・レクイエム」亡き夫は幸いであると思いつく聴く〉は歌集題になった歌である。前向きに生きようとする作者の思いが籠もった一冊である。

(松尾 祥子)

大きな字の国語辞典で調べんと手にとるときを夫はたのしげ

\*

## 早川昌成歌集『楽想の風』

大学、教師生活を経て退職後、現在までをまとめた第一歌集。音楽に造詣の深い作者らしく、本歌集も第一、第四楽章に分けられた長大な人生の歩みの交響曲となっている。

勤務校では、短歌の創作指導をしてお

り、生徒を数々の入賞に導いた。その時の作品からは、指導への真摯な姿勢が感じられる。また日々の生活の些細な発見や不便を、気取らないユーモアを交えてさらりと詠うところに魅力を感じる。教職一筋で勤め上げた作者だが、退職後の歌には、穏やかさと寂しさが漂う。

音楽が常に人生に寄り添い、その時々を豊かに染め上げ、世界を彩っている。曲名や音楽家などが作品に多く登場し、あらゆる音楽が流れ続け、読者を楽しませてくれる。

(椎名 恵理)

楽想の風は変はりてオーボエが第二主題に光をそそぐ

\*

## 橋本のりこ歌集『ストライプシャツ』

二〇一〇年から二〇二四年までに詠まれた第一歌集。高校教師としての日々の定年までを第一部、その後の再任用からを第二部としている。公私ともに「生老病死」「愛別離苦」を実感した白秋期であったとあとがきに述べている。

職場では多くの生徒と出会い、個性をつぶさに捉えた歌が魅力的である。また、定年後の新しい職場での歌も興味深い。私生活では自身の病、姉の病について

詠み、親族との死別の歌もある。母の死までを看取る歌には作者の静かで張り詰めた思いが強く伝わってきた。しかし本歌集が最も訴えかけてきたことは、そんな現実をそのまま受け止め、前向きに生きて行こうとする作者の姿である。ストライプシャツを着て背を伸ばす作者の姿が目に見え。

(関 裕子)

逝きし母に添ひて迎ふる朝にしてホームの日常始まる音おと

\*

## 森田卓子歌集『記憶の繭』

十五年間の作品五〇八首を収めた第二歌集。ご自身の体験や心情を素直に詠んだ日常詠が中心で、家族や故郷へ寄せる思いがあたたかく伝わる。包丁の切れ味が落ちていることに気付く歌や、ご主人の枕の凹みをなおす歌など、暮らしの中のささやかな場面を切り取り、胸の内をあらわす繊細な感性が印象的。また、ふるさと伊那谷の吊るし柿や白い曼珠沙華など、作者の心を支えてきた原風景とも言える光景を、美しい韻律にのせて描いた歌に感銘を受けた。この歌集の歳月には、弟さんのご逝去やご主人のご逝去などの悲しいことがあったが、作者は自分

自身を励ますように活動的な日々を送り、あかるい歌やユーモアのある歌も数多く詠んできた。その精神力の強さにも胸を打たれた。

(伊沢 玲)

吊るし柿風に揺れあひ触れ合ひて白き粉を吹く 素直に生きむ

\*

### 白川ユウコ歌集『ざんざん』

二〇一三年から二〇二四年までの作品を中心に五〇一首を収める第三歌集。

衝撃的な自殺未遂を題材とする一連から始まる。それからの時間をどのように生きるか、日常や風景を詠みながらも、生をめぐる作者の思いが静かに滲む歌集である。

作者には行動的な一面があり、周囲の人と自分を愛し、ひたむきに生きる作者の姿が軽妙に詠まれる。そんな生の濃さが冒頭の死の影と対比になって際立つ。

また相聞歌が魅力的であるのも本歌集の特徴で、夫婦の愛情が印象的に描かれている。

これらの幅広い題材の歌の間に詠まれる、浜松の海や風などの眼前の自然を詠んだ歌に、最も作者の力量を感じさせられて見逃せない。

(柴田 佳美)

海面に傷のようなる白き波くりかえし  
生れくりかえし消ゆ

\*

### 水辺あお歌集『空の静謐』

二〇一八年にコスモス短歌会に入会した著者の第一歌集。入会以前の作品も含め五一四首を収める。

退職後の日々を詠んだ歌が中心となるが、大きなできごとは詠まれない。日常生活の中なげないことがらやさやかな発見を独自の視点から詠んだ作品が特に魅力的である。一方、知的なユーモアの裏にこの世界に対する仄かな怖れや不安を感じさせる歌がこの歌集に奥行きを持たせている。

終わり近く、「どちやうの浮沈」の一連には少年期のつらい体験を詠んだ歌が三首置かれている。作者としてはこれだけ詠むのが精一杯だったというこの一連を踏まえて歌集を読み直すと、前述の怖れや不安の底にあるものがより深く理解できるように思われた。(前中 映)

雨の日の隣の屋根は濡れてをり隣の人を濡らさぬために

\*

### 中津川勲坐歌集『埼玉は晴れ』

埼玉県在住の作者の第二歌集である。

二〇一七年から八年間の作品の中、四九三首が収められていて、長歌もある。

本集には故郷の新潟の歌が多くあるが、叔母の看取りに伴い、自身を顧みることに繋がる。しかし思い出だけにとどまらず愛と慈しみに溢れている。時にはユーモアを交え、時には私情を吐露し、作者の心の大本を成しているのが解る。また、事物や社会詠などでは、物理学者としての考えが随所に表れている。その詠み方は、読者にとつて解りやすく納得させるものである。つまり、言葉を駆使することとに長けているということ。何といつても一首が小気味よいのである。これは本集全体に言えることで、作者の持ち味が存分に発揮されていると思う。

(能勢 玉枝)

わが身なす原子解<sup>ほど</sup>かれおほぞらへ拡がりゆかむ未来のある日

\*

### 桑原正紀著『ようこそ、歌の世界へ』

「短歌入門ならぬ短歌再入門」との言葉の通り、初心者のみならず短歌を長く続けている作者こそが読者として意識さ

れている。あらためて「短歌」という伝統詩を体系立てて、手ほどきをしてくれる一冊。第一章「和歌・短歌の歴史」、

第二章「実作のポイントⅠ 短歌の特性に沿って」、第三章「実作のポイントⅡ 主題に沿って」の三部から成る。なぜ五音と七音かという詩型の成り立ちにかかわる根本的な問いから、一首が鑑賞に堪える適切な情報量についての具体的かつ実践的なアドバイスまで、短歌にもう一歩踏み込むための再入門書。

(小島 なお)

〈歌とは何か〉〈なぜ歌うのか〉といった問いは(中略)〈私にとつて〉という前置きをしてでも考え続けていたいと思うのです。(中略)答えがないということとは、一人一人のとりあえずの答えが正解だからです。歌はつまるところ、自分の生にとつて意味があればそれでいいのです。

\*

田宮朋子歌集『光に濡れる』

二〇一五年から二〇二四年までの五〇三首を収める第五歌集。表題歌は「ものおもひ行き来するまま坐る身は一穗の灯の光に濡れる」。仏の象徴として、煩惱

を照らし消滅させるといふ灯明のもと、その身を清めんとする作者の気高い精神が窺える。

家族、旅、病、郷土、野の花、海、社会等々、それぞれの歌が、枕詞や語句の異称、比喩を駆使した手法によって、豊かな情感を纏い、詩情を纏う。本質を引き寄せる手腕が読者の思考を促すこともしばしばだ。悲しみの土壌に咲く生の営みを慈しみ深く描く田宮ワールドは、しなやかに深化している。

歌に対する作者の胆力と思う。掲出歌は、(時)の不可思議なありようを詩的に映像化する。

(金子智佐代)

無数なる波打ち際の足跡をかき消すは波いな時の指

\*

奥村晃作歌集『天啓』

作者二十番目の歌集。二〇二四年初春(八十八歳)から二〇二五年初夏(八十九歳)までの三十四首を収める。抄出歌は巻頭歌。無限に繰り返す海の波に注目している。「寄せて来て」から「しぶける」までに時の流れがある。叙述の歌(述べる歌)となつていることに気づく。「あとがき」に「気付き、発見、認識

系のただごと歌」を提唱し、その実践に努めてきた」とある。巻頭に置く歌は「ただごと歌」として推す歌と考えていいだろう。ということは、叙述がただごと歌の一要素であると言えるようだ。観察した結果をどの様にすくいとるか。描写するか叙述するか。つまり一瞬の切り取りを行う描写か、時の流れを伴う叙述かである。本歌集は描写より叙述の歌が多いように思われた。(風間 博夫)

寄せて来てテトラポッドにうち当たらしぶけるまでの波を見たりき

\*

令和7年に出版された会員の歌集・歌書20冊の合同出版記念会が開催された(著者のうち、中田英子氏・鮎川清氏・奥村晃作氏は欠席)。20人の担当者による充実した批評紹介が展開された。終了後会場を移し、コスモス五賞の受賞式が先ずおこなわれた。本誌発表順にO先生賞の磯川朋美氏、桐の花賞のくどうれいん氏、評論賞の伊沢玲氏、純黄賞の荒川ゆみ子氏、そしてコスモス賞の相川佑太(旧姓・岩崎)氏に。厳粛な受賞式に続き祝賀会、忘年会が和やかに催された。

(関連記事は172頁。)